

## 世界との交流と環境整備

鈴木英一

人文社会科学研究科教授

世界に通用する学生を育てるためには、世界と交流することが最も重要な要件の一つと考えられる。ここでは、世界の研究者・学生と交流するための環境整備を整備することが重要であると考え、その一環として時間の確保と時間の有効利用を提案したい。

### 海外滞在の勧め

博士課程研究科の学生、特に、中間評価論文を終えた3年次以降の学生は博士論文につながる研究を進めるためにも、また、大学院修了後に研究者として教育研究活動を行うためにも、海外に出かけて研究者や学生と活発に交流することを勧めたい。

海外滞在には数日から一週間ほどの短期滞在と数ヶ月から1年間といった長期滞在中が考えられるが、いずれも有益な活用が可能である。短期滞在の目的としては学会への参加が考えられ、そのついでに研究会やワークショップなどに出席できることもあ

る。学会の際には歓迎会や近郊の観光旅行があり、これを機会に、多くの研究者と交わることができる。

国際的な学会は、単に参加して基調報告や講演や研究発表を聴くだけでも研究活動を進める際に有益であるが、更に進んで自分の研究成果を発表することも考えられる。海外の学会で発表することは世界で活躍するための重要な第一歩である。大きな学会は、発表内容を予稿集に掲載するだけでなく、発表内容を基に書かれた論文を大会論文集として刊行することもある。これは、学生にとって重要な研究業績に含めることができる。

### 長期滞在中の取り柄

数ヶ月から一年といった中・長期の海外滞在中は得ることがより一層多くなる。半年間の滞在中であれば、アメリカの場合には9月から始まる秋学期の滞在中がお勧めであ

る。9月には日本では年度の途中であるが、アメリカでは秋学期が新学期であり、授業を受けるのに好都合である。大学院の新入生に対する指導を最初から体験することができるし、授業を初めから聴講するので、内容の理解も容易になる。授業は学期集中・学期完結型であるので、日本の通年授業を一年間受講する経験を秋学期だけで味わえる。

一学期まるまる滞在できると、たとい単位を取得しない形での受講であっても発表や質問の機会に恵まれることは間違いないし、授業に関して論文(レポート)を書けば先生は同じように指導・助言をしてくれる。さらに、授業に出席することによって、同世代の学生の研究活動から学ぶことも多い。海外の学生がどのような姿勢で研究に取り組み、実際どのように研究しているかを身近で見るとは有意義である。

また、ある程度長い期間滞在すると、短期滞在の際に得られない、授業や指導以外の様々な機会に恵まれる。一流の研究者を招いてコロキウム(colloquium)が開かれる。これは単なる講演会ではなく、十分に質疑応答の時間が確保されており、発表内容だけでなく質疑応答も勉強になる。これと対照的に思いつきや未完成の論文を発表できる機会もある。ある大学で行われているLunch Talkは好例である。学生が主催し、木

曜日の正午から1時30分頃まで開かれ、参加者は昼食をとりながら研究発表を聴く。発表内容は、近く開かれる学会の研究発表の予行演習のようにきちんとした発表もあれば、メモ程度のハンドアウトで進行中の研究を発表することもある。Lunch Talkには教員や国内外からの研究者も出席するので格好の勉強の場となる。

## 二学期・学期集中・学期完結授業の提案

中・長期の海外滞在になると時間の確保が重要になる。時間的・経済的な両面からお勧めなのが新学期一学期おおよそ4ヶ月の中期的な滞在である。欧米では9月や10月、アジアでは9月に加え3月が新学期の開始という大学が多い。このような中で新学期を海外の大学で過ごすためには、筑波大学の教育課程を改定することが望まれる。

筑波大学では開学から今日まで国立大学(国立大学法人)には珍しく三学期・75分授業・通年3単位(講義・演習)という教育課程を採ってきている。三学期制度を二学期・学期集中・学期完結授業に変更し、同時に、75分授業・通年3単位(講義・演習)を90分授業・通年4単位(講義・演習)にすることを提言したい。新しい教育課程では、一学期(前期・秋学期)が4月初めから7月末までの15週、二学期(後期・秋学期)が10月初めから2月第1週までの15週とし、

夏期休業は8月・9月、春期休業は2月・3月となる。90分授業・通年4単位については、現行の75分授業を15分延長するだけで3単位が4単位になり、学生の履修授業科目数が25%少なくなり、余裕のできた時間を学生自身の勉強時間に当てることができるようになる。

90分授業・二学期制の提言は、教育改善の要望を求められた際に、人文学類カリキュラム委員長をしていた1992年11月26日に「学期制と授業時間の変更に関する要望」として教育担当副学長に提案している。この問題はこれまで何度か議論されてきたがなかなか意見の一致が見られなかったが、現在では新たな検討課題となっている。図書館情報専門学群は図書館情報大学の場合と同じく90分授業・二学期制をとっている。一つの大学に二つの教育課程があることには多くの問題があるので、この問題の検討を早急に開始し、筑波大学の教育組織がすべて90分授業・二学期制を採用するようになることを期待したい。

#### 二学期・学期集中・学期完結授業の利点

二学期制の最大の取り柄の一つは年間30週という授業時間の確保が容易になるということである。筑波大学では、授業時間の確保のために月曜日の授業を水曜日に行うといった曜日変更がここ数年行われており、

このような変則的な事態は早急に正常化されることが望まれる。また、筑波大学開学以来実施している二学期推薦（帰国生徒特別選抜）入試による二学期入学者の教育がより円滑に行うことができるという利点もある。さらに、三学期末の授業・期末試験と前期個別入試の監督・採点の業務が重なるという問題を回避することができる。

二学期制は学期集中・学期完結授業という制度と組み合わせることによって更に多くの重要な長所をもつことになる。最も大きな利点は、学生が少数の授業科目を集中して勉強できるという点である。例えば、現在、通年で16科目履修している学生の場合、新しい制度では一学期と二学期にそれぞれ8科目ずつを週に二コマ（2回）受講し、結果的に一年間で16科目を履修することになる。この方式では、予習・授業・復習が8科目に集中でき、試験や単位請求論文（レポート）も8科目でよいことになる。

また、二学期入学者の授業履修が容易になる利点もある。現在は、二学期入学者は、夏季休業中に特別補習授業を受けて二学期の授業に臨むが、この方式は教員と学生に多大の負担を強いるものであるが、その効果はそれほど大きくないと思われる。それは、二学期入学者が夏休み中の限られた短期間にすべての授業の特別補習授業を受けることは時間的にかなり困難であるし、ま

た、たとい特別補習授業を受講したとしても、二学期授業が途中からの受講であることには変わりがないからである。他方、二学期・学期集中・学期完結授業という制度では、二学期入学者は、二学期の開始まで2ヶ月ほどの準備期間があり、さらに、二学期には他の学生と同じく授業を最初から受講することが可能になる。

さらに、上でも触れたように、二学期・学期集中・学期完結授業という制度では海外との交流が容易になるという長所もある。現在は欧米の9月新学期の大学に留学する場合には年度をまたいで履修する手続きをとり、通年とはいっても変則的な履修になる。しかし、新しい制度では一年であれ半年であれ、海外の大学に出かけることが容易になる。欧米の大学に半年留学する場合、筑波大学の一学期の終了後、夏休みの期間中である9月に海外の大学に出かけ、秋学期終了後の1月に帰国できる。また、3月が新学期であるアジアの大学に関しても、春休みの期間中に出かけ、一学期終了後の7月に帰国できる。

### 教員の研修時間の確保

世界に通じるような優れた学生を育てるためには教員も絶えず研究をしていなければならない、そのためには十分な研究時間と研究機会が与えられなければならない。

7年に一度一年間の研究専念期間というサバティカル・リープはこのような目的で考えられているが、これを確保することは難しい。特に通年の必修の共通科目を担当する教員の場合は短期間であっても極めて困難である。通年の必修の共通科目の場合は、専門科目と異なり、集中授業による補講や翌年開講が不可能だからである。

このような厳しい状況の中でも、二学期・学期集中・学期完結授業という制度を採用するならば、一つの学期にできるだけ授業を行い、もう一つの学期を研究専念期間とすることが可能になるからである。欧米の大学を考えた場合、学生だけでなく教員に関しても半年であれば、秋学期がお勧めである。9月の新学期の開始に合わせて出かけ、秋学期だけ滞在し、秋学期終了後の12月半ば過ぎに帰国するならば、入学試験などの校務を勤めることも可能になる。

筑波大学で世界に通じる学生を育てる一つの方策として二学期・学期集中・学期完結授業という制度の確立を強く期待したい。  
(すずき ひでかず/英語学)